

〔資料紹介〕奈良の戦後雑誌（3）

『玄想PENSÉE』の目次と主要記事解説（その2）

* 中嶋 優 隆・光 石 亜由美

要 旨

雑誌『玄想PENSÉE』は、一九四七（昭和22）年三月から一九四九（昭和24）年四月にかけて発刊された文芸雑誌である。出版社は、奈良・丹波市町（現天理市）に所在する養徳社である。今回は、『玄想』第2巻第4号（一九四八（昭和23）年四月）から、第3巻第3号（一九四九（昭和24）年四月）についての、雑誌の概要、目次の細目、特集記事の解説を行った。

キーワード ①『玄想』、②奈良、③戦後雑誌、④養徳社、⑤プランゲ文庫

〔資料紹介〕奈良の戦後雑誌について

メリーランド大学蔵のプランゲ文庫によれば、戦後、奈良県で発行された雑誌は八四誌にのぼる。文芸雑誌、教育雑誌、同人誌などその内容はさまざまであるが、戦後の奈良の文化的、文学的土壌の豊かさを物語るものである。二〇二二年三月の『奈良大学大学院研究年報』（第27号）に掲載した「奈良の戦後雑誌（1）」『大和文学』の目次と主要記事解説」に引き続き、この資料紹介では、『大和文学』と同じ養徳社から発行された『玄想』の後半・第2巻第4号（一九四八（昭和23）年四月）から、第3巻第3号（一九四九（昭和24）年四月）までを紹介する。前半の『玄想』第1巻第1号（一九四七（昭和22）年三月）から、第2巻第3号（一九四八（昭和23）年三月）は、「資料紹介」奈良の戦後雑誌（2）『玄想PENSÉE』の目次と主要記事解説（その1）」（『奈良大学大学院研究紀要』（第28号、二〇二三年三月）に掲載

載したので、そちらを参照してもらいたい。

まず、一では雑誌の概要説明、二では編集者、発行所など雑誌の基本的な情報、目次の細目、三では特集記事の解説を行った。なお、特集は毎号企画されているわけではない。特集が企画されている号のみ解説を行った。

目次の入力・作成は、中嶋が行い、雑誌の概要説明、特集記事の解説は中嶋と光石が分担して行った。解説の最後に担当者を明記している。

一 『玄想PENSÉE』の経緯

『玄想PENSÉE』（以下、『玄想』）は一九四七（昭和22）年三月から一九四九（昭和24）年四月にかけて養徳社から出版された総合文芸雑誌である。創刊号から二二号まで確認されている。

養徳社は、一九四四（昭和19）年に、出版社の統合整理の波をうけて、天理時報社出版部、甲鳥書林、六甲書房、朱雀書林、古書通信社が合併して設立された人文科学系の出版社である。戦後、東京復興の見通しが立たないなか、多くの学者や作家が養徳社を訪れたようであり、一九四五年からの二年間で書籍七十点以上を刊行した。創設の経緯については『創設のころ 養徳社創立六十年』（図書出版・養徳社発行、二〇〇六（平成18）、非売品。なお、同冊子は養徳社ホームページで閲覧可能）を参照されたい。

『玄想』の編集委員を務めたのは、安藤直正、藤田秀彌、三村啓吉、

吉岡武雄、庄野誠一、生駒藤雄、鈴木治である。また、中山正善（天理教真柱）が参加することも多かったようだ。それまで戦後の整理統合や解散させられた出版社から譲り受けた出版物の刊行に終始していたため比較的手が空いていた養徳社だったが、『玄想』刊行以後は編集会議が特に頻繁に行われるようになったという。創刊号の編集後記には、「思想こそ人間の偉大を形成する」というパスカルの言葉が引用され、「文化国家としての出版をする」に際して「ほんの卑近なことからでもよい、紛れもない此の自分の眼で見、自分の耳で聞き、さうして自分の頭で考へたり判断したり反省したりする習慣こそ、此の日本を救ふものと言ふべきであらう」と述べられており、日本再建のために各人が先哲を知り、自らの思想を築くべきだというのが『玄想』の基本理念であった。掲載記事もこの思想と共鳴するものが多い。

第1巻第1号から編集者・安藤直正、発行者・岡島善次の体制で雑誌を刊行してきたが、第2巻第5号（通巻13号）より、編集者は安藤直正から藤田秀彌へ、発行者も岡島善次から東井三代次へ変わった。

第2巻第7号（通巻15号）からは、雑誌の大きさがこれまでのB5判からA5判に変更され、ページ数も六四頁に増えている。また、印刷者が岡島善次から若林吉郎兵衛に変更になり、印刷所も天理時報社から大日本印刷株式会社の京都工場に変更している。

第2巻第6号（通巻14号）の「編輯後記」には、「今日程人間学的な立場よりする時流批判の必要を痛感させられる時はない。本誌の特色は最近漸く識者の注目を集めつつあるが、この本来の性格をより強

く敷衍し発展する為に、今後一層の飛躍を要請されてゐると思ふので、私達は決意を新たにして次号よりA5判六四頁とし、体裁内容共に新しい企画を盛り、今日の混濁した現実には焦点を合はせて編輯することにした」と判型と頁数のリニューアルを告知している。これにもないこれまで巻頭に掲載していたコロタイプのお絵を中止し、編集陣が刷新され、藤田秀彌、松井浩生、小牧昌実、大畑甚一の名前が挙げられている。

表紙も創刊号はグレコ、第1巻第2号（通巻2号）はゴッホ、第1巻第3号（通巻3号）はマチスと続き、通巻3号までは各画家の作品複製を表紙に糊付けしていた。通巻4号～5号（5号は入江泰吉撮影）はモノクロ写真、通巻6号～14号までは無地カラー刷りで表紙に目次が印刷されていた。判型が小さくなった通巻15号～17号の表紙は、土門拳撮影のロダンの少女像のモノクロ写真、通巻18号～22号の表紙は、土門拳撮影のロダン、エヴァ像のモノクロ写真である。

また、第3巻第2号（通巻21号）だけは、すべて福田恆存と矢内原伊作の対談「われわれ如何に生くべきか？ 現代精神の行方」で構成されている。

誌面構成は、創刊号から第2巻第6号（通巻14号）までが巻頭にコロタイプによるお絵を掲載し、その後文章を掲載していたが、先述したように第2巻第7号（通巻15号）からの判型変更によりコロタイプによるお絵は中止となった。

文章記事の寄稿者は学者や作家など多様である。戦後の養徳社には

学者や作家が多く訪れたことを先に述べたが、そのような状況から生まれた誌面構成だと推察される。今回、目次を掲載した『玄想』の後半・第2巻第4号（通巻12号）から第3巻第3号（通巻22号）の執筆者にも、亀井勝一郎、長與善郎、三好達治、武者小路実篤、大熊信行、岸田國士、三島由紀夫、武田泰淳、小島信夫、南博、網野菊らがいる。現在確認されるのは、第1巻第1号（通巻1号）、一九四七（昭和22）年三月）から第3巻第3号（通巻22号、一九四九（昭和24）年四月）までである。終刊の理由は不明である。

なお、『玄想』についての詳細な解説については、『占領期の地方総合文芸雑誌事典』（金沢文圃閣、二〇二二年六月）の『玄想』の項目（中嶋優隆）を参照されたい。
〔中嶋優隆・光石亜由美〕

〈凡例〉

- ・ 引用に際して漢字は新字体に改めた。
- ・ 目次は雑誌の目次頁を採録した。本文と相違がある場合は注記した。
- ・ 「二 目次」内の目次の項目で、↓と示したものは、「二三 主要特集の解説」で解説を行った。

二 目次

第2巻第4号 (通巻12号) 一九四八〔昭和23〕年四月一日発行



【写真①】
『玄想』第2巻第4号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 30円

挿絵 久保守・福澤一朗

目次

- 亀井勝一郎「罪の意識」(41)／長與善郎「生活の断章」(11)／三好達治「同感異見」(15)／佐藤信衛「幸福」(28)／リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」(23)／武者小路実篤「美しい国」(19)／矢島祐利「不滅あるひは恆存といふこと」(34)／青野季吉「家

の矛盾」(37)／大熊信行「肉食について」(1)／梅津次郎(口絵)「物語としての絵画」

注記 * 目次中、武者小路実篤、矢島祐利、青野季吉の三者のタイトルは、横

に太線があり、同じカテゴリーの記事として、他の目次と区別されている。*

亀井勝一郎「罪の意識」は、掲載ページでは「―親鸞との邂逅―」の副題あり。

* 三好達治「同感異見」は、掲載ページでは「―宛名のない手紙―に就て―」

の副題あり。* 佐藤信衛「幸福」は、掲載ページでは「わが用心」の副題あり。

* リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」は、掲載ページでは

「(2)」の併記あり。* 青野季吉「家の矛盾」は、掲載ページでは「家の矛盾

について」に変更。

第2巻第5号 (通巻13号) 一九四八〔昭和23〕年五月一日発行



【写真②】
『玄想』第2巻第5号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 30円

飾画 藤川栄子

目次

大熊信行「宇宙論と人性論」(1) / 中谷宇吉郎「雪を消す話」(37)
 / 福田恆存「幸福への意志」(10) / 土井虎賀壽「一匹の羊を求めるもの」(17) / 田中美知太郎「英雄崇拜について」(24) / リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」(31) / 三好達治「沈黙(散文詩)」(28) / 河北倫明「生活のなかの姿態(口絵)」

注記 * 目次では、福田恆存、土井虎賀壽、田中美知太郎の三者のタイトルは、横に太線が引かれることで同じカテゴリーの記事として、他の目次と区別されている。* 大熊信行「宇宙論と人性論」は、掲載ページではタイトル横に「イワン・カラマゾフの世界・現代の開闢説について・戦争観は宇宙論まで引きかえず・人性論は科学たりえないか」の併記あり。* 中谷宇吉郎「雪を消す話」は、掲載ページでは「科学とはどういふものか」の併記あり。* 福田恆存「幸福への意志」は、掲載ページでは「幸福への意思」に変更。* 土井虎賀壽「一匹の羊を求めるもの」は、掲載ページでは「文学の世界のヒューマニズム」の副題あり。* 田中美知太郎「英雄崇拜について」は、掲載ページでは「ひとつ

の対話―英雄崇拜について―」に変更。* 三好達治「沈黙(散文詩)」は、掲載ページでは「散文詩 三篇」と変更され、その三篇が「沈黙」「出発」「係蹄」と題されている。* リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」は、掲載ページでは「(3)」の併記あり。

第2巻第6号(通巻14号) 一九四八〔昭和23〕年六月一日発行



【写真③】
『玄想』第2巻第6号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 30円

飾画 佐藤敬・桑田道夫

目次

大熊信行「政治意志と人間探究の精神」(1) / 内田巖「絵画におけるヒューマニズムの系譜」(11) / 泉井久之助「表現と思惟―散文の型態―」(37) / 長澤信壽「神は何故に人間となりたまひしか―聖アンセルムスについて―」(42) / 坂田徳男「センスについて」(28) / 大澤章「ボードレールのある詩章」(21) / Khaos 一人称単数の思考(18) / 岸田國士「宛名のない手紙」の批判に答へる(47) / S・ジョンソン 中西信太郎訳「屋根裏住ひの利益」(25) / 井島勉「笑ひと悲しみ(口絵)」

注記 *目次では、泉井久之助、長澤信壽、坂田徳男の三者のタイトルが、横に太線が引かれることで同じカテゴリーの記事として、他の目次と区別されている。*大熊信行「政治意志と人間探究の精神」は、掲載ページでは「―政治学における暴力の意味―」の副題あり。*大澤章「ボードレールのある詩章」は、掲載ページでは「ボードレールの或る詩章」に変更。*泉井久之助「表現と思惟―散文の型態―」は、掲載ページでは、「表現と思惟―散文の形態―」に変更。*「Khaos 一人称単数の思考」は、掲載ページでは吉村正一郎の署名あり。*井島勉「笑ひと悲しみ」は、掲載ページでは「ドーミエの諷刺について―」の副題あり。

第2巻第7号(通巻15号)一九四八〔昭和23〕年七月一日発行



【写真④】
『玄想』第2巻第7号表紙

編集者 藤田秀彌
発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上四

部町10

頁数 64頁

定価 30円

目次

平田次三郎「習徳者の転進―ジイドのコミュニニズムをめぐって―」
(2) / 深瀬基寛「傍観的行動主義」(24) / **特集 職業と自己形成**
↓(1) 赤岩栄「社会との矛盾のなかに」(11)・日高六郎「知的職業のうしろめたさ」(14) / 片山修三「乖離の意識」(16) / 椎名麟三「解

体する自己」（19）／真下信一「先生」の場合」（21）／フェヌロン
津田穰訳「教育について ポーヴィリエ公妃へのすゝめ」（35）／
高田博厚「失はれた巴里」（50）／単純なる殺人（56）／林屋永吉「最
初のドン・ファン」（42）／市原豊太「或る朝」（57）

注記 *深瀬基寛「傍観的行動主義」は、掲載ページでは「ジイドのトリ
ヴィアリズムをめぐって」の副題あり。*フェヌロン 津田穰訳「教育につ
いて ポーヴィリエ公妃へのすゝめ」は、掲載ページでは「ポーヴィリエ公
妃へのすゝめ―娘の教育について―」に変更。高田博厚「失はれた巴里」は、
掲載ページでは「桑原武夫へ」の副題あり。*「単純なる殺人」は、掲載ペ
ジでは吉村正一郎と署名あり。

第2巻第8号（通巻16号）一九四八〔昭和23〕年八月一日発行



【写真⑤】
『玄想』第2巻第8号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刷

部町10

頁数 64頁

定価 30円

表紙 ロダン 土門拳 撮影

カット 桑田道夫

目次

特集 二つの極（2） 高桑純夫「実践への感情的契機―主情と社

会関心―」（2）・高橋義孝「現代における芸術の意味―政治と芸術の

次元―」（8）・中橋一夫「極限のエゴイズム―生命欲と道徳―」（14）

／清水幾太郎「古本屋の政治性（緑地帯）」（23）／宮城音彌「三つの

精神症状」（24）／本野亨一「不安」の血族と同伴者」（32）／「我

等の生涯の最良の年」（39）／安騎東野「回想の熱帯」（40）／詩 三

好達治「秋風裡」（53）／手塚富雄「もちどり」（54）

注記 *高桑純夫「実践への感情的契機―主情と社会関心―」は、掲載ペ
ジでは「実践への感情的契機―実存意識と社会認識―」に変更。*高橋義孝「現
代における芸術の意味―政治と芸術の次元―」は、掲載ページでは「現代に
おける芸術の意味―政治の世界と芸術の次元―」に変更。*宮城乙彌「三つの

精神症状」は、掲載ページでは「『オプティミズム・ペシミズム・ニヒリズムの解剖』」の副題あり。*本野亨一「『不安』の血族と同伴者」は、掲載ページでは「『不安』の血族と同伴者―椎名麟三とカフカの距離―」に変更。*「我等の生涯の最良の年」は、掲載ページでは、吉村正一郎と署名あり。

第2巻第9号(通巻17号) 一九四八〔昭和23〕年九月一日発行



【写真⑥】
『玄想』第2巻第9号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町10

頁数 64頁

定価 35円

表紙 ロダン 土門拳 撮影

カット 桑田道夫

目次

清水幾太郎「匿名の思想」(2) / 小島輝正「神の存在と価値について」

(4) / **特集 新しい人間・新しい倫理** ↓ (3) 南本富夫「ヤミ屋

の倫理」(10)・津村秀夫「日本映画の戦後の人間」(13)・大友福夫「労

働者の誇り」(17)・三島由紀夫「反時代的な芸術家」(19)・江原通子

「戦争未亡人のゆくて」(21)・大谷省三「農村の若き友へ」(24) / 大

熊信行「国家における人間実験」(28) / フェヌロン 津田穰「娘を

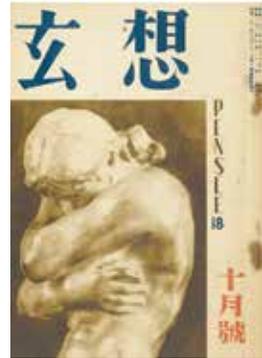
いかに教育するか」(39) / きだ・みのる「東京の「動物園」」(47) / 「如

是我聞」(46) / 文芸二十の扉 (56) / 武田泰淳「闇にたつ人(街の

人間玄想I)」(57)

注記 *小島輝正「神の存在と価値について」は、掲載ページでは「『神と自由』」の副題あり。*南本富夫「ヤミ屋の倫理」は、掲載ページでは「闇屋の倫理―道徳のモラトリアム」に変更。*フェヌロン 津田穰「娘をいかに教育するか」は、掲載ページでは「『ボーヴェリエ公妃へのすゝめ』」の副題あり。*きだ・みのる「東京の「動物園」」は、掲載ページでは「動物園」の「カギ括弧が取られている。*「如是我聞」は、掲載ページでは吉村正一郎の署名あり。

第2巻第10号（通巻18号）一九四八〔昭和23〕年一〇月一日発行



【写真⑦】

【玄想】第2巻第10号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町10

頁数 64頁

定価 35円

表紙 ロダン・エヴァ（土門拳撮影）

目次

小島輝正「自由のトランクの重さ」(3)／関根弘「『小さいひと』の

系列」(24)／**特集↓(4)** 山本和「世界秩序を回復する力」(11)・

小林珍雄「スコラの正戦論の修正」(13)・佐藤信衛「日本の平和主義」

(15)・宮澤俊義「平和への可能性」(18)・佐々木基一「戦争の幽霊」
(20)／清水幾太郎「誰か罪なき(緑地帯)」(22)／「勲章と死刑(カ
オス)」(33)／南博「アメリカのアメリカニズム」(34)／南本富夫
「特別読物 官僚の王国「大蔵省」の生態」(43)／「ペニシリ
ンが余つてゐる！(ルポルタージュ)」(40)／「貝殻追放」山口誓子・新島繁・
柴野方彦(56)／武田泰淳「もの喰ふ女」(58)

注記 小島輝正「自由のトランクの重さ」は、掲載ページでは「『自由のト
ランク』の重さについて―神と自由(承前)―」に変更。*宮澤俊義「平和へ
の可能性」は、掲載ページでは「平和の可能性」に変更。*「勲章と死刑」は、
掲載ページでは吉村正一郎の署名あり。*南博「アメリカのアメリカニズム」
は、掲載ページでは「アメリカの『アメリカニズム』」に変更。*「ペニシリ
ンが余つてゐる！」は、掲載ページでは「社会ルポルタージュ ペニシリ
ンが余つてゐる」に変更。*「貝殻追放」は、掲載ページでは、三者それぞれに山口
誓子「新しい歌を」・新島繁「たのもしい一市民たること」・柴野方彦「マン
ガを教室へ」のタイトルの記載あり。*武田泰淳「もの喰ふ女」は、掲載ペ
ージでは「街の人間玄想II」の副題あり。

第2巻第11・12号(通巻19号) 一九四八〔昭和23〕年二月一日発行



【写真⑧】
『玄想』第2巻第11・12号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町10

頁数 64頁

定価 35円

目次

福田裕「近代ニヒリズムの系譜」(3)／深瀬基寛「共通感覚について」
 (13)／座談会「風俗その他」岸田國士・吉村正一郎・三好達治(21)
 ／杉山喬「本庄事件は解決したか」(28)／フェヌロン 津田穰「娘
 を如何に教育するか」(33)／奥野信太郎「バラックと日本人」(40)

／「肩書の魅力(カオス)」(47)／創作 今井俊三「凡ては宙に浮いて」(48)

注記 *深瀬基寛「共通感覚について」は、掲載ページでは「―対話―」の副題あり。*杉山喬「本庄事件は解決したか」は、掲載ページでは「本庄事件は解決したか?」に変更。*フェヌロン 津田穰「娘を如何に教育するか」は、掲載ページでは「―ボーヴィリエ公妃へのすゝめ―」の副題あり。*「肩書の魅力」は、掲載ページでは吉村正一郎の署名あり。

第3巻第1号(通巻20号) 一九四九〔昭和24〕年二月一日発行



【写真⑨】
『玄想』第3巻第1号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町

頁数 64頁

定価 40円

表紙グラビヤ エヴァ 土門拳撮影

カット 桑田道夫

目次

平田平三郎「戦後精神の診断」(3) / 青野季吉「佐渡日記」(22) / 南博編「女子刑務所を訪ねて―ルポルタージュ」(30) / 戸田武雄「目的と手段」(12) / 「恐懼感激」(カオス) (37) / 創作 小島信夫「佐野先生感傷日記」(九十枚) (38)

注記 *南博編「女子刑務所を訪ねて」は、掲載ページでは「女子刑務所を訪ねて」に変更。*「恐懼感激」は、掲載ページでは吉村正一郎の署名あり。

第3巻第2号（通巻21号）一九四九（昭和24）年二月一日発行

※本号は奈良大学図書館に所蔵がないため、表紙の写真の掲載はなし。

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町10

頁数 66頁

定価 45円

目次

われわれ如何に生くべきか？ 現代精神の行方／対談 福田恆存 矢内原伊作／第一部 思想論 「不毛の自覚と世界性」(4)・「メタフィジックへの懷疑」(9)・「実存主義を繞つて」(13)・「機械的唯物論」(18)・「マルクシズムの見落したるもの」(22)・「革命と個人の自覚」(24)・「インテリゲンツィアの論理癖」(28) / 第二部 文学論 「九十九匹と一匹の迷える羊」(31)・「美と芸術観賞の限界」(38)・「批評精神の発生について」(39)・「小説と批評」(42)・「アヴァン・ギャルドの問題」(47) / 第三部 人生論 「われ如何に生くべきか」(49)・「神の国とユートピア」(55)・「愛とエゴイズムとについて」(57)・「幸福への道」(59)・「恋愛と結婚」(61)・「結語」(65)

注記 *「われわれ如何に生くべきか？ 現代精神の行方」三部は、すべて福田恆存と矢内原伊作の対談で構成されている。

第3巻第3号 (通巻22号) 一九四九 (昭和24) 年四月一日発行



【写真⑩】
『玄想』第3巻第3号表紙

編集者 藤田秀彌

発行者 東井三代次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 若林吉郎兵衛

印刷所 大日本印刷株式会社 京都工場 京都市右京区太秦上刑

部町10

頁数 70頁

定価 50円

目次

望月衛「映画と大衆精神」(3) / 本野亨一「文学者の折念と愛情—ヘルダーリンと梅崎春生—」(12) / 安騎東野「熱帯の生活」(41) / 高橋義孝「私はこういう人を知っている A叔父のこと」(34) / 南博「鐘の鳴る丘」と子供たち」(21) / 創作 真鍋呉夫「美しかった

た日」(52) / 創作 網野菊「雨降り」(64)

注記 *真鍋呉夫「美しかった日」は、掲載ページでは「美しかった日に」に変更。

三 特集記事の解説

〈1〉特集「職業と自己形成」(第2巻第7号)

特集「職業と自己形成」は『玄想』第2巻第7号(一九四八(昭和23)年七月)で企画され、赤岩栄「社会との矛盾のなかに」、日高六郎「知的職業のうしろめたさ」、片山修三「乖離の意識」、椎名麟三「解体する自己」、真下信一「先生」の場合の五つが掲載された。以下に各論の概要を示す。

赤岩栄(一九〇三(明治36)〜一九六六(昭和41))は、キリスト教思想家、牧師として活躍し、戦後は椎名麟三と月刊誌『指』を刊行した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一枚である。赤岩は戦後社会を生きる現代人の「良心」と「自己」のかかわりを論じる。戦後の今日では、人々は道徳的な使命よりも「利潤」追求を優先せざるをえず、またその「利潤」追求は「闇会社」への参加につながり、「良心」に反する営為となってしまう。現代人はそうした矛盾に堪えながら、苦痛に耐えるものは救われるという「あの約束」を信じ続け、「真の自己」形成を試みるほかないと説いている。

日高六郎(一九一七(大正6)〜二〇一八(平成30))は、社会学

者として活躍し、戦後は『近代文学』に参加して評論活動を開始し、市民運動にも積極的に参加した。エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』（創元社、一九五二〔昭和45〕）などの翻訳も手掛けた。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約九枚である。日高六郎は現代社会の特質である「人道主義の精神」と、「知的職業」——芸術家や知識人のうしろめたさの関係を論じる。現代では知的職業も「社会に役立つこと」が求められるが、それは本質的に「個人的なもの」である。ここに知識人の「うしろめたさ」がある。これを「人道主義の精神」は治癒しようとする。しかし、それは実生活をより高い次元に導く芸術の機能と背理するのであり、むしろ知的職業人たちの「うしろめたさ」は、芸術や科学の「人間にとつての位置」を明らかにするため糸口となるかもしれないと示唆する。

片山修三（一九一五〔大正4〕—一九八二〔昭和52〕）は、横光利一に師事し、小説家として活動を開始。戦後は思索社の社主として雑誌『思索』を編集発行した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約九枚である。片山は資本主義下の「職業」と「自己」の乖離を問題にする。現代人は資本主義機構のなかの個人の位置を「職業」と呼ぶが、その位置づけと自分の能力・才能との間に「乖離」を感じてしまう。この感覚を「自己」の荒廢に向かわせず、むしろ「非常に健全なる人間的意識」だと捉え返し、環境を改変しようとする試みることが「自己」形成の結果ともたらずのだとする。

椎名麟三（一九一一〔明治44〕—一九七三〔昭和48〕）は、戦後に

実存主義的な作風の戦後派作家として活躍した。一九五〇〔昭和25〕年には赤岩栄によってキリスト教の洗礼を受けている。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約六枚である。椎名は「職業」による「自己」形成の可能性を説く。現代人は、死ぬほど過酷でありながら実際に死ぬこともできない労働に駆られ、「無意味」な生活を繰り返している。しかも、いかにしても生きねばならない人間にとつて、「職業」は「食ふための手段」にすぎず、それまでに積み上げてきた「自己」は職に就けば解体されるのである。現代の最重要課題はこの労働の「無意味さ」から如何にして「意味」を回復するかにあるとする。

真下信一（一九〇六〔明治39〕—一九八五〔昭和60〕）は、哲学者として活躍し、同志社大学教授などを歴任。一九三三〔昭和8〕年に雑誌『世界文化』を創刊し、反ファシズムの立場を表明し、治安維持法違反で検挙された。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一枚である。真下は地方の青年教員たちの葛藤を通して、「職業」と人間のずれを問題化している。多くの青年教員がそうであるように、あらゆる人間は「自己」の自由な形成と、「職業」の「型」（「らしく」とのあいだに矛盾や葛藤を感じないわけにはいかない。職の「型」が封建的な「身分」に等しいとすれば、この感覚は前市民的社会から脱皮しようとする民主主義的な新しい社会人Ⅱ市民が抱える悩みにはかならないのであって、日本社会の最大課題である民主化の徹底、ファシズム根絶へと発展させねばならない問題だと論じる。

本特集の論者たちは、「職業」が身分的な規定性として機能しえた

中世的だった戦前の封建的社会に対して、戦後社会では「職業」がむしろ人間を疎外しているという認識を共有している。「編集後記」によれば、本特集の記事は論者たちの「告白」であり、読者が「自己の問題」を考える糸口となることが期待されているようだが、掲載記事が提示したのは広義の〈市民〉という「自己」がもつ悩みだといってよいだろう。いずれの論者も戦後社会では「職業」が人間性を疎外していると述べることで、むしろ「自己に悩む自己」の意識を読者のなかに惹起したものと考えられる。

〔中嶋優隆〕

〈2〉特集「二つの極」(第2巻第8号)

特集「二つの極」は『玄想』第2巻第8号(一九四八〔昭和23〕年八月)で企画され、高桑純夫「実践への感情的契機―実存意識と社会認識―」(目次の副題は「主情と社会関心」となっている)、高橋義孝「現代における芸術の意味―政治と芸術の次元―」、中橋一夫「極限のエゴイズム―生命欲と道徳―」の三つが掲載された。以下に各論の概要を示す。

高桑純夫(一九〇三〔明治36〕―一九七九〔昭和54〕)は、哲学者、評論家として活躍し、戦後の「主体性論争」において積極的に発言を行った。著書に『主体性と実存』(増書房、一九四八〔昭和23〕)などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。高桑は唯物史観以後における人間の「主体性」のありかを検討している。唯物史観の誕生以後、歴史には必然性(客観的法則)があり、個

人の営為(そして主観的感情)すらもそれによって規定されるとされるようになった。その理論的枠組みのなかで、人々(特に知識人層)はどのようにして「主体的真実」を獲得できるのか。一般的にこの問題は人間の「意志」や「感情」だけを強調するか、サルトルのように史的唯物論を決定論として捉え、それに対する「自由意志」による脱却を唱えることに陥っている。しかし、重要なのは、必然を「知性」によって理解しつつ、その必然に対する「現実的自由」を「意志」と「感情」を動員しつつ実行していくことなのである。その「現実的自由」の行使こそが、「人間の創意」の発露なのであり、結果的に歴史の動力となり、歴史の必然性と一致することになるのだと述べる。

高橋義孝(一九一三〔大正2〕―一九九五〔平成7〕)はドイツ文学者および翻訳家として活躍し、名古屋大学などの教授を歴任。戦後は文芸学に基づいた評論活動を積極的に行った。著書に『文芸学批判』(国土社、一九四八〔昭和23〕)や『芸術について』(玄理社、一九四八〔昭和23〕)などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。高桑は高見順の評論「描写の後ろに寝ておられない」を話の枕に、政治と芸術(特に文学)を論じていく。「政治」とは「人工的に高められた人間の秩序への意志」である一方、「芸術」は人間の知性や「政治」が捉えられずにいる、「無意識の世界」―人間のインファンティリズムのある場所―を捉えつくそうとする点で、「政治」に対する反指定として機能せざるを得ない。したがって、一般に行われている「政治か文学か」という二者択一的な議論の仕方

は誤りである。むしろ、二つはその機能において大きな隔たりを持ち、「政治」が常に破綻の契機を内包している点で、「芸術」がわずかに進歩的なものとして優っているのだと論じる。

中橋一夫（一九一一〔明治44〕～一九五七〔昭和32〕）は英文学者、文芸批評家として東京大学教授などを歴任。著書に『道化の宿命―シェイクスピアの文学』（中央公論社、一九四八〔昭和23〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約三二枚である。「生命」の欲求に基づくものならば人間の行いは「道徳」に反しないのかという問いが、ロレンス作品の批判的読解を傍証に検討されている。ロレンスは彼の「エゴイズム」を「生命の哲学」によって粉飾し、「生の流れへの帰一」こそが、「宇宙」との有機的な関係を確立するとした。すなわち、「生」を肯定的に捉えたのである。そして、ロレンスは神秘的な発想を説いたわけだが、一方の「大衆」は「生命」の呼びかけに対して「無意識の倫理感」からためらいを覚えてしまう。むしろ、ロレンスのような作家たちの「知的興味」に貫かれた哲学は、その結論にしてようやく「大衆」の苦悩に至るのだと考えるべきではないか。この「大衆」の苦悩こそ「新しい秩序」をうち立てる端緒になると唱える。

「編集後記」によれば、この特集を通して人間が「二つの世界」を生きる現代において「いかに生くべきか」が「観念的な思惟としてではなく、生活感情の場に於て、新しきテーゼ確立のために諸矛盾を別抉し、問題とされねばならない」とある。たしかに、いずれの論者も

「知性」や「知識人」を相対化しうる、「生活感情」に即した現実的なまなざしを共有し、この観点から「いかに生くべきか」という同時代の課題を弁証法的に解決しようとしている点が興味深い。

〔中嶋優隆〕

〈3〉特集「新しい人間・新しい倫理」（第2巻第9号）

特集「新しい人間・新しい倫理」は『玄想』第2巻第9号（一九四八〔昭和23〕年九月）で企画された。特集冒頭で編集部より「現代はいかなる時代だろうか。混乱の過渡期と云はれる時代にあつて、それならば新しい時代に向ふ新しい人間像と倫理はどこに、どのやうにして現はれつつあるだろうか。私たちはこれを各方面に問ふてみた」と特集の趣旨が述べられている。本特集では、南本富夫「闇屋の倫理」、津村秀夫「日本映画の戦後の人間」、大友福夫「労働者の誇り」、三島由紀夫「反時代的な芸術家」、江原通子「戦争未亡人のゆくて」、大谷省三「農村の若き友へ」の六つが掲載された。以下に各論の概要を示す。

南本富夫の履歴は不明。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一枚である。「道徳のモラトリアム」という副題がついている。闇屋をやらなければ生きて行けない戦後の経済的困窮では、闇屋は単に否定されるべきではなく、「道徳のモラトリアム」的存在である。しかし、激化するインフレ状況下では多くの人が闇屋となり、検挙される人々も増えている。闇屋について「あらゆる面からの検討と解決」

が必要だが、我が国では現状は「放置」されているとする。

津村秀夫（一九〇七〔明治40〕～一九八五〔昭和60〕）は映画評論家である。朝日新聞社に入社し、映画評を担当した。著書に『映画と批評』（小山書店、一九三九〔昭和14〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一一枚である。「日本映画の戦後の人間」では、日本映画においては戦前も戦後も、「映画の創造する新しい人間像」を見つけない。ただ、「男女スタアの型が横行」するのみであると苦言を呈する。そんな中でも、戦後の日本映画で唯一の変化は、「幾分でも頹廃と悪にふれ得たこと」である。また、溝口健二監督の「夜の女たち」と、黒澤明監督の「酔いどれ天使」は、僅かに興味を持った戦後日本映画であると評している。

大友福夫（一九一三〔大正2〕～二〇〇〇〔平成12〕）は労働運動、労働組合を専門とする社会政策学者である。専修大学教授などを歴任。著書に『日本労働組合論』（未來社、一九八一〔昭和56〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約七枚である。大友の論ずるところ、日本の労働者は戦後、二・一闘争や三月闘争などの「歴史的ショック」を経験した。労働者にとっては大きな衝撃であったが、「むしろ労働運動の大きな流れの中にこそ、新しい人間としての労働者の形成がおこなわれる」とし、日本の労働者が生産者としての価値に目覚め、成長することを期待すると論じている。

三島由紀夫（一九二五〔大正14〕～一九七〇〔昭和45〕）は小説家である。代表作は『仮面の告白』（河出書房、一九四九〔昭和24〕）、

『金閣寺』（新潮社、一九五六〔昭和31〕）などである。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約八枚である。新しい人間と新しい倫理は別のものではない。そして、新しい人間と倫理の模索は「原型」の模索を意味している。「原型」とは「芸術家のもつとも非芸術的な欲求の象徴」である。創作の根元について、いくつかの寓話を交えて抽象的に語っている。

江原通子（一九二〇〔大正9〕生まれ）は、編集者である。東京府立第一高等女学校卒業。東洋大学の文学修士課程を修了。一九四六〔昭和21〕年、文藝春秋者に入社。仏教や茶道に造詣が深い。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一一枚である。戦争未亡人は戦後の生活難で困窮しているだけでなく、戦中は「軍神」としてあがめられていた夫や息子の死に対して、戦後は「犬死」という言葉が与えられることに精神的な苦痛を受けている。さらに、戦争未亡人は再婚問題にも直面している。彼女たちの自由と生活の安定が望まれると訴える。

大谷省三（一九〇九〔明治42〕～一九九四〔平成6〕）はマルクス主義農業経済学者である。東京農工大教授などを歴任。著書に『自作農論・技術論』（農山漁村文化協会、一九七三〔昭和48〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一一枚である。K君という教え子から来た手紙への返信の形式で書かれている。K君は地主だったが全小作地を解放したり、農村青年の意識改革に努めたりしているが孤独感になやんでいる。大谷は、「自己の所信を実践にうつ

すこと」だと励ます。

本特集は戦後の「新しい人間」「新しい倫理」をどのように模索するかを、映画評論家、社会政策学者、小説家などの立場から提起してもらった特集である。「倫理」は戦後のキーワードの一つであるが、それを芸術家、労働者、戦争未亡人、農村青年などそれぞれの視点から模索しているところに、本特集の特徴がある。 [光石亜由美]

〈4〉 特集（第2巻第10号）

特集は『玄想』第2巻第10号（一九四八〔昭和23〕年一〇月）で企画された。特集のタイトルは表紙にも本欄にも記載されていないが、『編輯後記』に東京裁判の判決が迫っていることを受けて、各分野の専門家から「平和への提言」をいただいたとある。山本和「世界秩序を回復する力」、小林珍雄「スコラの正戦論の修正」、佐藤信衛「日本の平和主義」、宮澤俊義「平和への可能性」、佐々木基一「戦争の幽霊」の五つが掲載された。以下に各論の概要を示す。

山本和（やまもと）（一九〇九〔明治42〕～一九九五〔平成7〕）は日本基督教団の牧師、神学者である。関東学院大学、玉川大学で教授を歴任。著書に『弁証法神学の倫理思想』（新教出版社、一九六一〔昭和36〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約七枚である。戦後の「混乱した世界の秩序を回復する力」、そして「平和」を実現するものは「神と人間との宥和」であり、「キリストこそ世界と人類との恒久平和そのものである」と説く。

小林珍雄（よこ）（一九〇二〔明治35〕～一九八〇〔昭和55〕）は、宗教学者で上智大学教授などを歴任。著書に『宗教と政治』（改造社、一九四九〔昭和24〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約八枚である。正当防衛の条件が充たされるなら戦争も正戦とみとめられるスコラ学以来の伝統的正戦論があるが、戦争放棄をうたった新憲法後、正戦はありえない。カトリシズムからくる反戦論もこの戦争放棄という「修正された正戦論」に基づくとする。

佐藤信衛（さとう）（一九〇五〔明治38〕～一九八九〔昭和64〕）は哲学者である。法政大教授などを歴任。三木清らとともに雑誌『文学界』に参加した。著書は『考—新論理学』（日本評論社、一九四九〔昭和24〕）などである。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約九枚である。中国やビルマの内戦など戦争の危機を背景に平和運動が世界に高まっている。戦争を止めるためには「世界政府」のようなものが必要だろう。米ソは「未来世界の計画」について一致した方向を見出せないだろうか、と平和の構築を求めている。

宮澤俊義（みやざわ）（一八九九〔明治32〕～一九七六〔昭和51〕）は、憲法学者である。東京帝国大学教授、貴族院議員などを歴任。自由主義的、合理主義的立場に立ち、護憲運動をすすめた。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約八枚である。戦争は人間性というものに起因するならば、人間性を根本から変えないと、戦争はなくならない。また、原子力の時代の戦争は、人類の絶滅をもたらす可能性がある。人間が戦争をほろぼさなければ、戦争が人類を滅ぼすだろうと警鐘を鳴らす。

佐々木基一（一九一四〔大正3〕～一九九三〔平成5〕）は文芸、前衛芸術、映画など多方面で活躍した評論家である。雑誌『近代文学』創刊に参加。著書に『私のチェーホフ』（講談社、一九九〇〔平成2〕）などがある。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約五枚である。東西冷戦、各国の内戦が続いている「戦争か革命か」という現状で、「そのいづれかが、より平和的手段に於て遂行され得るかを探索」する「優れた耳」を養いたいと主張している。

識者からなる「平和への提言」であるが、抽象的提言から、「世界政府」の必要という具体的なものまで幅広い。戦後といっても東西冷戦や各国の内戦といった戦争状態が続くなか、いかに平和を実現するかという切実な願いが反映されている特集である。〔光石亜由美〕

付記 本稿は、科研費（研究番号16H03386）「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」（基盤研究B）研究代表者…大原祐治（千葉大学）の研究成果の一部である。

Abstract

Postwar Magazines in Nara (3)
Table of Contents and Main Articles of “Genso” (2)

Yutaka NAKAJIMA Ayumi MITSUISHI

“Genso” was a literary magazine published in Nara between 1947 and 1949. This article provides an overview of the journal, a detailed table of contents, and commentary on the special features (author biography, and commentary) on “Genso” .

Key words : ①Genso、②Nara、③postwar magazines、④Yotoku-sya、⑤special feature

